

ヤンゴン素描 52

龍王ブーリダッタ本生 (その2)

山形洋一

第五場、龍宮：カメの言い逃れ

人間世界での死刑を逃れたカメは、ヤムナー川の底へ底へと潜ってゆくうちに、竜宮に迷い込んでしまい、城門警備の兵隊に捕まってしまいます。またかいな、と思ったカメは、うまい嘘を思いつきます。

「わてを粗末に扱うたらあかんでえ。こない見えても、かのカーシー国のお使者じゃ。こら、頭が高いぞ、わりゃあ」

衛兵は半信半疑で、カメを龍王の前に引き立てます。カメは嘘をつくとなると度胸がよろしい。

「龍王様、かの高名なるブラフマダッタ王様から伝言がございます。諸国と同盟を結ぶ一環として、王女サムッダジャーを龍王さまのお妃にと申しておいでです」

喜んだ龍王は、若い龍族の武人四人を返礼の使者に立てます。

第六場、都ヴァーラーナシー：龍王の使いが追い返される

カメは龍王の使者の案内にたちますが、ヴァーラーナシーがもうすぐと言う所までくると、「皆さん、そこに蓮池が見えまっしゃろ。わては王様に、帰りには蓮根を持ってくるようにと言われてますよってに、ちょっと潜って掘ってきます。皆さんお先にどうぞ」と、またもやうまく逃げおおせてしまいました。

四人の使者はカメの言葉を信じ、勇んで城門を通り、王様に御目通りを願います。

「サムッダジャーお嬢様のお興入れの相談にやってまいりました」

「何の話ぞな。カーシー国の姫が龍族なんぞの嫁になるなど、あつてはならんことじゃ」

龍王の使者たちはカッと成りかけた怒りを何とか鎮めます。毒の一息でブラフマダッタ王を殺すのはたやすいこと。だがそれをぐっと堪えて、とにかく国に報告に帰ることにしました。

第七場、都ヴァーラーナシー：龍族による都の包囲と、サムッダジャー王女の婚約

使者から話を聞いた龍王は、プライドを傷つけられて怒ります。仕返しに龍族を総動員してヴァーラーナシーへ出かけ、都の城壁、大通り、四辻、市場など、人が行き来するところ

に長々と伸びたり、とぐろを巻いたりして、通る人々をにらみつけました。これではうっかり外も歩けません。商売もできず、兵糧攻め状態。人々はブラフマダッタ王に泣いて頼みます。王も仕方なく、サムッダジャー王女を龍王に嫁がせることにしますが、本人には行き先が竜宮だとは告げませんでした。

第八場、龍宮：サムッダジャー王女と四人の男児

サムッダジャー姫は無事龍王に嫁ぎますが、そこが龍宮だとは気がつきません。なにせ龍王の厳しいお達しで、皆その正体を隠し、まるで天上界にいるように装っていたからです。

そうして四人の王子が生まれました。それぞれのDNAの75パーセントは龍、25パーセントが人間ということになります。

長男の名はスタッサナ。

次男の名はダッタ。

三男の名はスバカ。

末っ子の名はアリッタ。しかし片目のアリッタという意味で、カーナーリッタと呼ばれるようになりました。それというのは、手下の誰かがこっそり耳打ちして、

「お母様にあなたの正体を見せたら、どないなるでしょう」

と唆（そそのか）され、お母さんのお乳をもらいながら、鱗の生えた龍の尻尾を見せました。お母さんはキャーッと悲鳴をあげ、末っ子の目を爪で引っ搔いてしまったのです。

第九場、天上、帝釈天の宮殿：ダッタがブーリダッタと改名

子供達は成人し、中でもダッタは賢く思慮深い青年になりました。天界の王である帝釈天の誘いで、龍たちは天上合宿に出かけますが、天の神々と龍たちが諍いを起こした時、ダッタはうまく調停をします。それを見た帝釈天が大変感心して、

「あなたの視野の広さは特別や。ただの『ダッタ』では勿体無いよって、『ブーリ』（広い）を頭につけて、『ブーリダッタ』と呼ばしてもらいまひよ」

と言いました。ブーリダッタは帝釈天に気に入られて家来のように使えますが、

「流石に天界の王様ともなると、豪勢な生活やなあ。お父ちゃんは龍王なんて威張っとるけど、大したことあらへん。わしも次に生まれ変わる時は天界に生まれ変わりたい。それには布薩に励んで功德（くどく、大学の単位・クレジット、航空会社のマイレージ、コンビニのポイントのようなもの）をせっせと貯めな。龍の世界は落ち着いて修行できんよって、人間界に行かせてもらお」

と殊勝な決心をして、王の承諾を得ます。

第十場、地上、ヤムナー河畔：ブーリダッタの布薩をブラーマンの獵師に見られる

ブーリダッタが布薩の行（禁欲と瞑想）の場所を選んだのは、やはりヤムナーの河畔でした。なにせ龍宮から一番ちかい地上が、その辺りだからです。彼はシロアリの巣（文献では蟻塚、anthillとありますが、シロアリが捨てた塚はコブラの住処となることが多い）の上に長々と寝て瞑想に耽ります。そこに、獵師を生業とするブラーマンが、獲物を求めて通りかかります。ブーリダッタはこのブラーマン獵師が意地汚く狡い男だと見破ったので、自分の秘密を守らせる代わりに、息子共々龍宮に連れて行って歓待します。

第十一場、龍宮：ブラーマン獵師とその子が歓待を受ける

ブラーマンは息子を連れて龍宮に遊びますが、やがて地上が恋しくなります。龍王には出家がしたいからと嘘を言いますが、龍王は獵師の心をお見通し。無理やり土産に持たせたのが、願えば何でも欲しいものが手に入るという「如意珠」でした。

第十二場、地上：獵師が如意珠を失う

獵師は息子を連れ、喜び勇んで地上に戻る途中、つい水浴びがしたくなり、手に持っていた如意珠を地面に置いた途端、珠は地下に吸われて見えなくなりました。家に戻ると、カミさんが怒っています。

「あんたら、今まで私をほったらかして、どこほつつき歩いとったん？ 何やて、龍宮城。ほうー、結構な目え見はったんやねえ。ほんで、わてにもなんか土産はあるんやろなあ。ええっ、もろたけど失くしてやてえ。信じられんアホやなあ、あんたは」

このあとも延々と続く罵詈雑言は、聞き苦しいので略させていただきます。

家を追い出された獵師ブラーマンは、やがて如意珠を持つ蛇使いブラーマに会い、珠と引き換えにブーリダッタの居所を教えるのですが、その話の前に少し時間を巻き戻す必要がありますので、次回に回させていただきます。